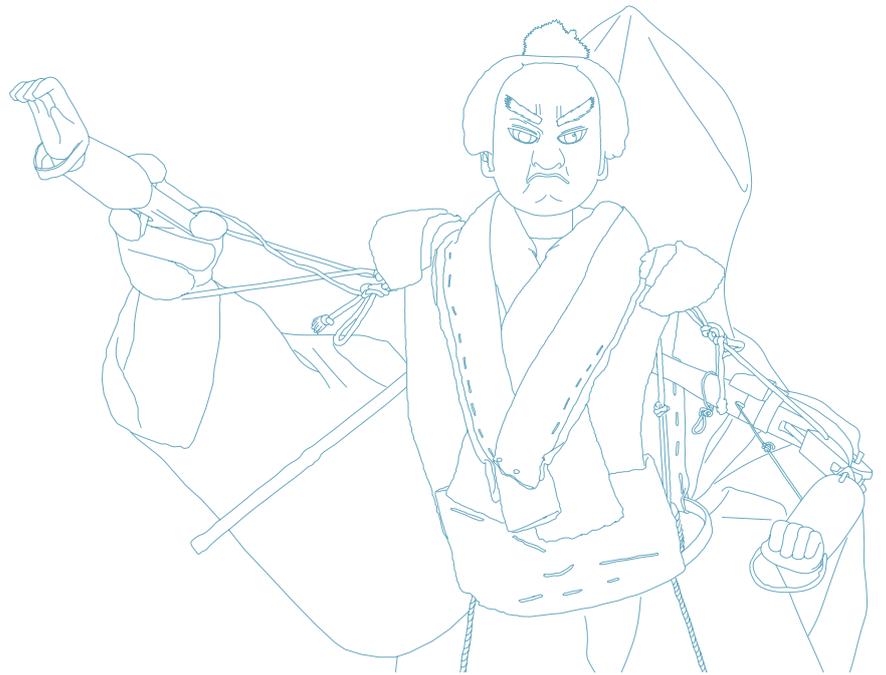


第一章
総
説



第一節

日本の伝統人形芝居における車人形

日本には多種多様な人形芝居が伝承されている。その中で車人形はどのような位置にあるのだろうか。人形操法および演者のありかたについてみてみよう。

一 人形操法について

日本の伝統人形芝居に用いられる人形は、糸操りや影絵などさまざまな操法のものがある。その中で車人形は、首（人形の頭部）の下に付けた棒を遣い手が握って操作する形式である。遣い手が、糸や棒といった媒介物を介さずに直接人形を操作するのが特色である。

そのような形式の中でも、車人形は人形浄瑠璃文楽で用いられる三人遣い（以下、文楽式三人遣い）の系統に属する。文楽式三人遣いは、主遣い、左遣い、足遣いと呼ばれる三人の人形遣いが一体の人形を遣う操法である。主遣いは、人形の首を左手、人形の右手を右手に持って操作する。人形の首には下に胴串どくしという十数センチほどの棒が取り付けられているが、人形遣いはその胴串を左手で握って首を遣う。左遣いは、差し金という数十センチの棒を介して人形の左手を操る。足遣いは、両手で人形の両足を操作する。

車人形においては、いくつかの工夫によって文楽式三人遣いの人形を一人で遣うことが可能となっている。三人遣いの人形を一人で遣う試みとしては車人形の他に乙女文楽や北原人形（大分県）のは

さみ遣いがあるが、このような形式は、元からの一人遣いと区別するために特殊一人遣いと呼ばれている。文楽式三人遣いの人形は、「大人形」と呼ばれることもあるように糸操りの人形などと比べて大型であり、そのため観客に与える印象も大きい。車人形をはじめとする特殊一人遣いでは、文楽式三人遣いとほぼ同じ大きさの人形を遣うことができるのである。

車人形において人形遣いは、ろくろ車や箱車などと呼ばれる、底に車輪を付けて移動できるようにした小箱に腰を掛ける。そして文楽式三人遣いの主遣いと同じく、人形の首を左手で、人形の右手を右手で遣う。人形の左手は、特殊な仕掛けが施された弓手ゆんでという道具を用いて操作するが、弓手は人形遣いが左手で操作する（動きの一部は右手が担当する）。人形遣いは左手で胴串と弓手の両方を遣わなければならぬのである。人形の足にはかかとの下に「かかり」と呼ばれる突起物を取り付けられており、人形遣いは両足のそれぞれ親指と人差し指で「かかり」を挟むことによって人形の両足を操作する。

車人形には、文楽式三人遣いとの違い点もある。左手の動きに制約が大きいことや、人形を正面で構えることなどであるが、もっとも大きな違いは人形の位置であろう。文楽式三人遣いでは人形は宙に浮いており、手摺と呼ばれる板などの上辺を地面に見立てて演技をおこなうのに対し、車人形では両足が直接舞台を踏むことになるのである。近年ではその特性を生かし、役者と共演するなどの試み

もおこなわれている。

さらに昭和五十六（一九八一）年には西川古柳座において、特殊一人遣いである乙女文楽を参考にして新車人形が考案された。新車人形では特殊な器具を用いることにより人形の胴を固定させ、その器具に胴串を差し込む。そして人形の首から人形遣いの頭に紐を渡すことにより、首の動きを人形遣いの頭の動きに連動させる。人形の左手は、右手と同じように、人形遣いが左手で直接持つて遣う。車人形は、新たな可能性を持った人形操法でもあるといえるであろう。

二 上演組織

車人形は、埼玉県加治村（現飯能市）出身の初代西川古柳（二八二五―一九七）によって創案されたとされる。伝承地は、かつて存在していた上演団体も含め、東京郊外が多摩地域を中心とする南関東にほぼ限られる。現在は東京都八王子市下恩方町、東京都奥多摩町川野および埼玉県三芳町竹間沢^{ちくまざわ}で伝承されている。

伝承地の調査は、昭和初期に初めておこなわれた。小田内通久により、昭和二（一九二七）年と七年の二度にわたってなされたものである。漏れもあると思われるが、当時の分布状況を概観することができる。なお、当時ほとんどの車人形は個人が所有していたという。そこで以下に、小田内の調査で明らかになった各座の所在地および所有者をみてみよう。「小田内一九二七、同一九三二」。

まず昭和二年末の時点では次の四座のほか、未確認ながら東京都多摩村（現東京都多摩市）にも一組（これについては、「沼一九九」を参照）あったという「小田内一九二八」。

東京都（現東京都）八王子市・小泉因幡（芸名雀屋妻三郎）

東京都横山村（現東京都八王子市）・丹沢彦太郎（芸名薩摩浜尾太夫）

東京都恩方村（現東京都八王子市）・瀬沼時太郎（芸名西川柳時）

東京都小宮村（現東京都八王子市）・小町源三郎（芸名西川柳寿）

なお瀬沼時太郎の座が、現在の八王子車人形西川古柳座である。次に昭和七年の調査では、専業者なのか否かといった演者のあり方にも関心が払われている。まず「専門の人形遣い」として挙げられているのは次の三名である。

東京都渋谷町（現東京都渋谷区）・吉田冠十郎

千葉県長浦村（現袖ヶ浦市）・吉田冠之助

神奈川県下中村（現小田原市）・西川伊左衛門

また「他に本業があるので、ただ趣味の上から」すなわち素人として上演活動をおこなっているものとして、既に触れた丹沢彦太郎および瀬沼時太郎の他に、次の二座が挙げられている。

東京都調布町（現東京都調布市）・薫森亮

埼玉県三芳村（現三芳町）・前田信忠

さらに、上演活動はおこなわないものの「後援者として、専ら、八王子の人形の保存に尽力してゐる人」として八王子市の平音次郎が挙げられている「小田内一九三二」。

以上のように、昭和初期において車人形は、玄人によっても素人によっても上演されていることがわかる。また伝統人形芝居の場合、自然村を基盤として上演組織が形成されることがよくあるが、車人形の場合はむしろ個人を中心にして上演組織が作られることが多いといえるのではないだろうか。

三 語り芸との関係

日本の伝統人形芝居は、語り物芸能によって上演することが多い。車人形は、近世末期から多摩地域で流行するようになった説経節との結びつきが強いとされる。

その一方で車人形は、義太夫節浄瑠璃によっても上演されている。玄人として東京の寄席などで興行した吉田冠十郎は、「もとは説教節に合せて演じたが、…東京に出て男女の義太夫語りを頼んだ」という〔小沢 一九二六 三九〇頁〕。また現在の西川古柳座に残る昭和初期の興行記録（第五章第二節参照）においても、義太夫節による公演が多く記載されている。一般に人形操りと語り物芸能の結びつきは固定的なものではない。必要に応じて義太夫節で上演することはごく自然なことだといえるだろう。

しかし次第に、義太夫節による上演はおこなわれなくなっていくようである。全国的にみても素人義太夫は昭和初期あたりから退潮期に入るが、そのためであろうか。いずれにせよ車人形はもっぱら説経節によって上演されるようになったのである。

とはいえ説経節の人気もやがて衰退期を迎えることとなった。それを受けて西川古柳座では、昭和五十年代から義太夫節による上演に転換している。それからしばらく西川古柳座は、説経節での上演をおこなっていない。ところがその後、説経節を復活させようとする動きが徐々に成果を上げたことにより、再び説経節によって車人形が上演される機会も生まれている。今日、車人形と説経節は、新たな関係を探っている時期にあるといえるだろう。

註（1） 三人遣いには、文楽式とは異なる操法もある。例えば、三人

の人形遣いがそれぞれ、人形の両手、人形の頭部（あるいはそれに加えて胴）、人形の両足を遣うものであり、愛知県の尾張地方を中心とした地域の祭礼において上演される人形などに用いられている。

（執筆者 細田 明宏）

文献

小田内通久 一九二八「八王子車人形の話——由来と現状」、『民俗芸術』

一一五、四九〇頁（説経節の会編二〇一五『説経節研究——歴史資料編』方丈堂出版、所収）

小田内通久 一九三二「車人形」、坪内博士記念演劇博物館編『国劇要覧』

梓書房 一九三〇—一九八頁

小沢愛園 一九二六「車人形雑記」『三田評論』三四九三七—四二頁

沼謙吉 一九九九「多摩村の車人形」多摩市史編集委員会編『多摩市史

通史編二・近現代』多摩市 一九七〇—二〇一頁

細田明宏 二〇一三「車人形と新車人形——八王子車人形・五代目西川

古柳氏に聞く」『八王子市史研究』三二—一四三頁

宮川孝之 二〇一五「平均二翁、坪内博士の来王を語る」『説経節の会編』説

経節研究——歴史資料編』方丈堂出版 一六二頁

第二節

江戸系三人遣いと車人形

一 江戸系人形浄瑠璃の系譜

今日、文楽と通称される人形浄瑠璃は、「大阪固有の芸術」と言われるが、かつては江戸・東京根生いの系譜も存在していた。

人形浄瑠璃が江戸に持ち込まれた^①嚆矢は、宝永三（一七〇六）年であったとされるが、常設となったのは享保五（一七二〇）年、人形遣いの辰松八郎兵衛による辰松座創立であると考えられている。ここを起点に江戸に人形浄瑠璃の地盤が築かれ、明和・安永・天明期（一七六四～一七九〇）には盛況を呈した。

『義太夫年表 近世篇』（八木書店）の興行記録を辿ってみると、「吉田」「豊松」という上方でも馴染みのある姓のほか、「西川」「辰松」「藤井」姓を名乗る人形遣い^②たち、それに「和泉屋五郎兵衛」という江戸の人形細工人の名も見える。

だが、江戸の人形浄瑠璃は寛政頃から歌舞伎に押されて衰退してゆく。幕末から明治にかけては、寄席興行が中心となるが、歌舞伎で義太夫狂言を上演する際には、江戸・東京系の人形遣い^③たちに助言を仰ぎ、稽古に立ち会ってもらう風習が、少なくとも明治末期までは続いていた。歌舞伎役者からも教えを請われた吉田国五郎と西川伊三郎が江戸―東京系の人形遣いの双壁をなしており、また西川姓の女流人形遣い^④がいたことが『万朝報』や『都新聞』等の寄席興行欄からも分かる。

それでもなお、人形浄瑠璃は古めかしいものゝと見なす風潮が強

まり、次第に顧みられなくなってゆく中、明治二十六（一八九三）年十月、三代目吉田国五郎や西川伊三郎を中心とした一座による神田の新声館公演、さらに明治三十六（一九〇三）年十月、吉田国五郎の本郷座での公演が試みられる。だが、それ以後は再び寄席に戻る^⑤こととなった。

大正十一（一九二二）年四月、四代目吉田国五郎は女義太夫の竹本素女と手を携え、「東京文楽」^⑥を立ち上げるが、寄席自体の減少もあり、この「東京文楽」も六月には幕引きとなる。

昭和四（一九二九）年には、吉田新三郎が「義太夫人形座」^⑦を設立するが、翌年十二月以降の足取りは未詳である。

昭和十二（一九三七）年、東京人形浄瑠璃の復興を掲げて、建築家の池田三国（本名 勝二）が「南北座」^⑧を旗揚げする。人形陣は池田三国を初めとする素人だったが、指導に招いた吉田新三郎とその門下^⑨が加勢した。昭和十三（一九三八）年六月、吉田新三郎は五代目吉田国五郎を襲名する。戦後は大阪文楽座が分裂した際、三和会に参加していた。昭和二十五（一九五〇）年、奇しくも同じ年に、池田三国と吉田国五郎はその生涯を閉じる。

二 西川伊左衛門と吉田冠十郎

江戸・東京系の三人遣いと、車人形の両方を手がけたのが、西川

伊左衛門と吉田冠十郎の兄弟である。

西川伊左衛門は、下中座の「中興の祖」として尊敬を集めていたことから、『国指定重要無形民俗文化財 相模人形芝居下中座の歩み』(平成十(一九九八)年三月 下中座)では顔写真入りで詳しく紹介されている。伊左衛門は、五代目西川伊三郎に師事し、初め伊三子を名乗る。語女大夫(五代目吉田国五郎の実姉)を後妻に迎え、夫婦で冠十郎とともに車人形を遣っていたが、明治四十一年(一九〇八)年、義太夫節と三人遣いが盛んな小竹に移住し、指導に専念することとなる。大正十(一九二一)年に西川伊左衛門と改名した。なお、下中座には伊三子のもと思われる車人形の足が残されているという。

吉田冠十郎については、前掲『下中座の歩み』の他、『晚春譜 武蔵車人形』(久米井亮江 非売品 一九八三年)等でその足跡を知ることができる。兄と同様、五代目西川伊三郎に師事し、その後吉田東九郎(吉田冠二 伊三郎の弟)にも学んだ。車人形は、明治二十四(一八九二)年、八王子の小泉座に出入りするようになってからであるという。のちに三代目西川古柳(瀬沼周助)、吉田冠次郎(丹沢秀)という車人形遣いの後進をよく育てた。

なお、初代西川古柳(山岸柳吉)の名は、冠十郎が明治二十六年(一八九三)年に与えたとされる。『万朝報』の寄席案内欄を見ると、同年二月から四月にかけて、東京市内で次のような出演記録が確認できる。「西川古柳」の名のお披露目公演であった可能性も考えられよう。

【二月二十六日】▲麻布区 ○三河台麻布亭 車人形西川古柳

【三月十九日】▲神田区 ○橋本町附木店大々亭 車人形西

川古柳

【四月十三日】▲浅草区 ○蔵前八幡寿亭 車人形西川古柳

吉田冠十郎の名は、明治中期あたりまでは西川伊三郎とともに出演記録が確認できる(以下『読売新聞』より)。

【明治十七(二八八四)年十一月十八日】

○人形芝居 浜町の東華楼で西川伊三郎吉田冠十郎の一座太夫八重太夫連中にて明十九日より初日を出す其の狂言八日蓮記の通しにて或家に秘蔵する日蓮上人自筆の題目を借り受け大切に池上本門寺の場にて舞台に飾り見物に拝ませると

明治後期には、前述の新声館・本郷座の公演や、新聞の寄席案内欄で冠十郎の名が見える(以下『都新聞』より)。

【明治四十二(一九〇九)年十二月一日】

▲深川区 車人形吉田冠十郎

【明治四十三(一九一〇)年七月十五日】

▲麻布区 ○二の橋吾妻関亭 大人形吉田冠十郎

【明治四十三(一九一〇)年七月三十一日】

▲赤坂区 豊川亭 改良車人形吉田冠十郎一座

右の記録にある「大人形」という名称は、同時期の吉田国五郎や淡路人形一座にも用いられていることから、大型の人形を三人で遣う形態を指していると考えられる。冠十郎は、それと並行して車人形も演じていたのである。右の記録からすると、明治四十三(一九〇七)年の一月から六月の間に、何らかの「改良」を車人形に施したようである。

明治末期以降は、寄席のほか、素人義太夫相手の貸席で人形を遣っていた。三人遣いの人形にも秀でていた冠十郎だが、「車人形」の吉

田冠十郎も此頃は貸席で素人義太夫などの相手になつてゐる」「演芸風聞録」「朝日新聞」明治四十五（一九二二）年一月二十九日朝刊七面」という書き方がされていることから、主に車人形の方で出演を請われていたのではないかと推察される。

大正初め頃には病を得ていた^⑩ようだが、浅草花やしきなどの小屋で興行を打っていた。その頃の冠十郎の舞台の様子を、演劇研究家の小澤愛園^{よした}が「浅草の操り芝居（吉田冠十郎一座と吉田国五郎一座）」『演芸画報』大正三（一九一四）年十月 二六〇三頁で紹介している。

この間電車のなかで、大阪文楽式人形芝居吉田一座と記した花屋敷の広告を見た。（中略）この一座では、一人の人形を一人で遣つてゐる。随つて人形遣ひは、小さな腰掛を臂に結び付けて、それに掛けて、手で人形の手を、足で人形の足を遣ふのである。

右の描写から、この「大阪文楽式人形」というのは車人形のことであつたと見てよい。しかし、なぜ「車人形」ではなく、「大阪文楽式人形」という看板を掲げたのだろうか。冠十郎の弟子のひとりである吉田冠次郎の回顧談^⑪によれば、冠十郎は文楽での修業経験はなかつたとのことである。この記事のタイトルにあるように、同じ時期に三代目吉田国五郎が花やしきの近くで興行中であり、その江戸・東京系の人形とあえて差別化しようと「大阪文楽」という語を用いたのかもしれない。地は説経節ではなく、義太夫節の常陸太夫の語りで『源平布引瀧松波琵琶の段』『由良港千軒長者山の段』『碁太平記白石斬吉原の段』をかけていたという。この時点では車人形の技法があまり気にそまなかつたという小澤だが、大正七（一九一八）年、調布に赴いて冠十郎に聴き取りを行い、のちに「車人形雑記」『三田評論』通卷三四九号 大正十五（一九二六）年九月」という文章にまとめあげた。

大正十二（一九二三）年に二百年忌を迎えた近松門左衛門の作品上演会の企画を報じる記事の中では、「人形芝居の第一人者なる吉田冠十郎氏」「人形芝居」「読売新聞」大正十三（一九二四）年四月九日朝刊四面」という紹介がなされている。ここでは「車人形」という文言はなく、三人遣いの人形の遣い手としての評価ではないかと思われる。「南北座」公演に吉田冠十郎一座の人形遣いが参加していることから、冠十郎一座が三人遣いも並行しておこなっていたはずである。例えば昭和十四（一九三九）年一月の「南北座」公演では、「冠次郎」「東十郎」の名が見える。

昭和九（一九三四）年十月頃より、女学校での人形浄瑠璃公演が試みられるようになり、その人形陣として吉田冠十郎一座が出演していた^⑫。こちらも三人遣いの人形と思われる。

車人形は大正から昭和にかけて、坪内逍遙、三田村鳶魚、河竹繁俊など複数の研究者の注目を集めるようになった。大正十三（一九二四）年、国民新聞社の国民史学会主催で「郷土芸術車人形」を観る会が六月十四日に開催された。昭和八（一九三三）年にJ・B・シヨウが来日した時には、三月九日に早稲田大学で演技を披露している。

シヨウ翁お茶をのみながら吉田冠十郎の操り人形に感服する。振袖の美しいお染人形で喜怒哀楽の表情を演じて見せる。シヨウ翁、盛に頭をかしむけたり、あごに手をやつたり、はてはハラキリの注文に冠十郎ナイフをとつて得意の一場面。彼の生命力の哲学はこのハラキリを何と解釈した事だらう？ 『聞き書き』『藝術殿』国劇向上会 梓書房 昭和八（一九三三）年 五八〜五九頁

しかし、東京の人形遣いをめぐる状況は厳しいものであった。昭

和十一（一九三〇）年六月九日の『読売新聞』で、吉田冠十郎を写真入りで取り上げた「芸は一生修業の辛さ」という記事は、

東京の人形使ひがみな絶えて、《残》つてゐるのは七十二歳の吉田冠十郎たゞ一人、それで人形といへば大阪と、みなかう思うやうになつたと綴っている。

昭和十五（一九四〇）年刊『芸談百話』（黒崎貞治郎 博文社）に収められた「衰亡の芸を護る」（四二〜四四頁）においても、説経節の家元若松若太夫は現状を次のように語っている。

車人形には車人形の味がありまして、今では説経節にはなくてはならぬものです。（中略）車人形は、一年のうち秋の農家のお祭りに村から村へと旅巡業するだけで、一年に四十日とやりません。従つてこれを専門としてゐるものはなく、この消えなんとする芸術を死守してゐる人は八王子におよび千葉県、神奈川県の一部に散在する十数人で、大抵はお百姓が常職です。中には文楽人形の遣ひ手だつた人が居りますが、やはり車人形も文楽人形風の操りでやるものですから、ほんとうにいい味は出ません。私はこれを中央で紹介して、大いに都会人の鑑賞に供したいと思つて折角力を入れてゐる次第です。

こうした状況下、昭和十六（一九四二）年に邦楽協会に「浄瑠璃人形部」が新たに設置される。

大阪の日本因会が此程人形遣ひも合流して太夫、三味線、人形の三業となつた事は前号に報道した通りで、東京にても人形

浄瑠璃芝居に全力を投じて活躍してゐる南北座の池田三国氏並にその一党及び八王子車人形等に向つて警視庁当局はその団結を希望してゐた処、今回邦楽協会々々長笹川臨風氏並に岩崎書記長の斡旋の下に協会内に浄瑠璃人形部を設置、これが部長として池田三国氏を決定し約五十人の全員が参加する事になつた。

「邦楽協会 義太夫部役員異動と人形浄瑠璃部の新設」
『太棹』第百三十号 昭和十六（一九四二）年十月 二八頁

東京の浄瑠璃人形部に参加したという「約五十人の全員」とは、「南北座」と「八王子車人形」の座員の総計ということになるであろうか。この後、実際にどのような取り組みがなされたのかについては未詳である。

吉田冠十郎はこの時すでに七十七歳、昭和十四（一九三九）年の「車人形を見る会」（三越ホール）を最後に舞台を退き、昭和十八（一九四三）年に病床についた。冠十郎所蔵の人形は、矢崎俊三氏に譲渡され、江戸・東京系の人形遣いの足跡を辿る貴重な資料となつている。

註（一）江戸の人形浄瑠璃の興行については、淵田裕介（一九九八）年「江戸の人形浄瑠璃」（岩波講座 歌舞伎・文楽 第9巻 黄金時代の浄瑠璃とその後 岩波書店）で先行研究が紹介されている。

（二）「手前がまた前髪の時分、大阪には大江忠兵衛と云ふ名人があり、江戸には本所の埋堀（横綱）と云ふ所に和泉屋五郎兵衛と云ふ人がゐて、これが結城、薩摩の二座の細工人でした。その和泉屋へ手前は父の使ひで、かう云ふ手とか、かう云ふ足とかを詠へに行つたもので、鬘は馬道の大勝、その他で拵へましたが、今では自分々々で拵へると云ふやうな次第です。」（吉田国五郎翁「防風子 大正元（一九一二年）八月『演芸倶楽部』第六号一五八〜一六二頁」。

『浄瑠璃雑誌』第三百八十九号（昭和十五年五月）の写真頁には、五代目吉田国五郎が所有していたと思しき素盞鳴尊の人

- 形の写真に、「この人形は江戸人形名作者泉屋五郎兵衛の作にして、芝白金神社にてお祓した神体であります」という説明文が添えられている。ただし、五代目吉田国五郎が戦後に三和会に加わったときには、衣裳は持っていたが、人形はなかったという（吉田襄助師談 聴き取り調査による）。
- (3) 「人形の型は好く役者衆の方から聞きに来るので、此春亡くなつた菊五郎殿が、播磨太夫の出語で八重垣姫の奥庭を演じた時には、私が行つて種々教へてやつたことがあります。」「人形の型」吉田国五郎明治三十七（一九〇四）年一月『歌舞伎』第四十四号 五九〜六〇頁。
- (4) 拙稿「二〇〇四年「近代日本の人形劇観——伝統人形劇の消長を中心に——」『アジアの藝術思想の解明——比較美学的観点から——』平成十二年—十五年度科学研究費補助金報告書 一五一〜一六〇頁。
- (5) この明治期の新声館・本郷座での公演については、倉田喜弘一九九五年『東京の人形浄瑠璃』（演芸資料選書・5、国立劇場調査養成部芸能調査室）に詳しい。
- (6) 『都新聞』の「芝居と遊芸」欄（大正十一（一九二二）年三月三十日〜同年六月二十四日）でその動向が窺える。
- (7) 『浄瑠璃雑誌』第二百七十八号（昭和四（一九二九）年三月三二頁「東京より（十六日）」）で「本年一月より人形芝居を設立」とある。『太棹』第二〇号（昭和五（一九三〇）年十二月四〇〜四一頁「会報」）にある、十二月五、六日の品川座公演まで活動記録が確認できる。
- (8) 拙稿「二〇〇八年「東京浄瑠璃人形芝居『南北座』」（近現代演劇研究）Vol.1 近現代演劇研究会 一五〜三四頁）。
- (9) 吉田国五郎については、下中座一九九八年『国指定重要無形民俗文化財 相模人形芝居下中座の歩み』十頁掲載の「西川伊左衛門 系譜」による。池田三国については、安部豊一九五〇年「池田三国逝く」『演劇界』四月号による。
- (10) 『朝日新聞』「演芸風聞録」（大正二（一九一三）年六月二十六日朝刊七面）に「人形の吉田冠十郎が中風で寝てゐる」とある。話し手 吉田冠次郎（丹沢秀）、聞き手 落合達郎「一九五九年「冠次郎夜話——車人形ききがき——」『横山文化』第五号 横山文化会 一四八〜一五四頁」。この中では、五代目吉田国

五郎についても触れられている。

- (12) 「南北座初春公演」『太棹』第百一号 昭和十四（一九三九）年一月二五頁。
- (13) 「語左衛門、相模太夫連の人形入り義太夫会」『太棹』太棹社第六十号 昭和九（一九三四）年十二月二二頁。
- (14) 『多摩文化』第二十号「車人形特集」（多摩文化研究会 昭和四十三（一九六八）年）に、昭和三（一九二八）年から昭和七（一九三二）の興行に関する記録が掲載されている。この時期は日本各地の伝承文化への関心が高まり、昭和三（一九二八）年一月に創刊された『民俗藝術』（編輯 小寺融吉）には各地の人形芝居に関する記事が多数掲載されている。その一つに第一巻「八王子車人形の話」（小田内通久）がある。
- (15) 矢崎家資料については、港区立港郷土資料館『研究紀要7』（平成十四（二〇〇二）年）に詳しい。

*引用文中の傍線および《》の補記は、すべて澤井による。
（執筆者 澤井 万七美）

